

ツイⅡ 西壁初登と、ここ3年の海外遠征で学んだこと

鈴木 雄 大 (THE NORTH FACE ATHLETE, 稲門山岳会)

(1) 『アルパインクライマーとしての成長』

この3年間は私にとって、アルパインクライマーとして大きな成長の年となった。

アルパインクライマーに必要な経験値、それは本当に多くのことが求められる。山や壁の中で難しいセクションをこなすためには、トラディショナルなフリークライミング、アイス、ミックスのスキルや、シビアなエイドの技術がもちろん必要だ。そして大体のヒマラヤやアンデスでの登攀において、本当の核心部となるのは、高所で永遠と続く3～4級程度の青氷や、非現実的な形をしたスノーマッシュルームの稜線の迷路を解いていくこと。それに今晚のビバークポイントがどこになるのかといった不安と戦いながら、己を信じて登り続けるメンタル。テントの中でもやることは沢山あり、斜めのテラスで足と頭を浮かせながら快眠するスキルも結構大事だ。もちろんチームワークも各人が登れるグレード以上に重要な要素だと僕は考えている。また、山岳スキーの経験から得られる、積雪不安定性の判断や雪山での直感力、強い足腰もアルパインクライミングに直結する。

山の麓では、例えばパキスタンの辺境の村で、ポーターやガイドと遠征を成功させるために関係性を築くコミュニケーション力や人間性、そもそもの遠征をオーガナイズするためのプランニング力、トラブルがあっても冷静に対処する図太い神経が必要になってくる。これらは僻地でのアルパインクライミングのビッグルートを成功させるためのほんの一部に過ぎず、僕のこれまでの経験を全て合わせてもまだま

だ学ぶべきことが沢山ある。

少し前の話に遡ると、私は2013年頃から東京の早稲田大学山岳部で本格的な登山を始めた。日本で本格的な登山を始める一つの入り口が、大学山岳部であり、各大学のやる気ある学生たちが、時には他大学のクライマーと友人となり、ロープを組むことも珍しいことではない。2022年のハンター北壁、2023年と2024年のペルー・パキスタン遠征のパートナーも主にこのような繋がりから、チームを組むことになった。そもそも日本では海外遠征も視野に入れたアルパインクライマーが少なく、(大体25歳～29歳で10人ちょっとだろうか)このような活動をしているクライマーは、とても小さなコミュニティの中で、ごく自然に噂に入ってくる。

学生の頃は、国内では、主に日本アルプスでの長期山行を行っていた。日本アルプスは標高3,000m程度だが、海に近く、厳冬期にしっかりと晴れるのは週に1日程度。そして、意外にも人里離れたアプローチが多いので、悪天候で耐え忍びながらテントで生活する技術を磨くには良い場所である。シャモニーやアラスカのような、写真映えするルートは少ないが、悪天候で耐え忍びながらテントで生活し、タフなクライミングの経験を積むには世界有数だと断言できる。大学の山岳部では、日本の地理的、気候的要因もあってか、通常の冬山行計画は平均しても12日間程度は確保される。この経験は現在、アルパインクライミングの遠征で、せいぜい4～5ビバークだけで登るのに随分と精神的障壁を下げていていると感じている。

3. 海外登山記録

一方、私は並行して海外にも登山へ出掛けていた。ドロミテやヨセミテでのビッグウォール (The Nose と Free Rider but Not “free climbing”)、パタゴニアでの爆風の中登頂したいくつかの登攀、ネパール・アイランドピーク的一般ルートや2017年のラジョダダ (6,426m) 初登頂など、少しずつではあるが、登山の経験値を蓄えていった。特にラジョダダでは、近年行っている遠征と比べると、登攀の難易度こそ劣るものの、アタック日の行動時間は26時間という、非常に限界に近いサミットプッシュとなり、未知の対象への登り方と、情報のない冒険的な登山がいかに素晴らしいかを体に刻み込まれる強烈な体験となった。エベレスト街道と違って、登山者ともほとんど出くわさなかったのも良いスパイスとなっていた。

そして卒業後の23歳から27歳くらいまでは、日本の最北部である北海道に仕事の関係上移住し、そこでは主にスポーツ的なミックスクライミングの技術や残置なしのアルパインクライミングの経験値を高めていった。

私は北海道を「Little Canmore」と呼んでいる。1～3時間のドライブで、アプローチ15分程度の良質なミックスクライミングルートが多くあり、ボルトに守られた上で、ツールを使ったフリークライミングを練習しやすい環境だ。ここで、日本最難グレードであるM11+までのミックスクライミングを登り込んだ経験も、後の海外遠征でのミックスピッチに対して、精神的かつ肉体的に、大きなアドバンテージを感じている。

2022年晩春、私は世界的なアルパインクライミングのテストピースとも呼ばれる、ハンター北壁のムーンフラワーに挑戦した。これまで日本や世界各国で行ってきたアルパインクライミングの経験が、世界的な課題でどれだけ通用するかを確かめてみたか

ったし、遠く離れたアラスカへの憧れの気持ちもあった。結果としては、壁が終わる“Bibler Come Again Exit”まで何とか登り切る事ができた。核心の一つ、Shaftの氷が途切れていたり、Tamara’s traverseの入り口のWI4の氷が無く、シビアなミックスクライミングのエイドとなったり、厳しいコンディションの中、なんとかトップアウトできたことは大きな経験となった。今まで日本で登ってきたアルパインの経験は、間違いなく世界でも通用すると。しかし、今振り返ると、ムーンフラワーは全てのピッチがトポに記載されており、僕らが行った行為は確かに技術的には非常に難しかったかもしれないが、トポをなぞって登るだけのスポーツ的なものであり、「冒険心溢れる登攀」とは言い難い。それでも当時は、自分にとっての未知を克服していくだけで充分野心的であった。

そして2022年の夏、私は初めてのカラコルム遠征へと旅立った。目標は未踏の7,000m峰、ガッシャーブルム6だ。結果的には6,000mまでしか登れなかったが、大きなエクスペディションに必要な様々なことを学んだ遠征となった。その一つが、パートナーシップの重要性。当時、私たちはお互いの都合や、各自の登りたい別の山行を優先させ、メンバーの3人でしっかりとトレーニングする時間を取れなかった。僻地で誰か1人が窮地に陥った時に、信頼し合える関係ができてなく、酷い体調不良の仲間をカバーできるほどの関係性が出来上がっていなかった。その遠征はトラブル続きで、飛行機が5日間飛ばなかったり、リエゾンオフィサーとコックが喧嘩したり、隊員が3週間下痢になったり、最後はパートナーのクランポンが壊れて敗退した。多くはここには書ききれないが、クランポンがもしも壊れていなかったとしても、G6は登れていなかっただろう。

偶然にもG6隊のこの3人は、2024年、それぞれ

別々のチームとして、パキスタンのトゥイ2峰、ネパールのパンドラ、フォレソビで素晴らしい登攀を成功させ、個人的にも大変嬉しいことであった。

それ以降、私は自身のクライミンググレードや経験値を高める意外にも、遠征パートナーとの登り合わせにも重きを置き、自分のクライミングを多少減らしてでも、パートナーとのビッグアルパインルートに向けた特殊なトレーニングを増やしていった。例えば、ビッグルート特有のトラクションを使った同時登攀や、不快なテラスでのビバークなど。

そこで私は、大学山岳部の横のつながりで以前からの友人であり、たまたま歳が近く、時間にも比較的余裕のありそうな成田啓と西田由宇をチームに誘い2023年の遠征を計画した。彼らとなら十分なトレーニングの時間も確保できそうだったし、結果として、遠征までに合計30日間ほど山で一緒に過ごすことができた。

そして、2023年、完璧に未登の登攀対象を探して、ペルー・アウサンガテ北壁と、パキスタン・ガンバルゾム北西リッジを初登攀した。登攀の詳細は今年のRock & Snow や、『登山研修』にも寄稿しているので、ここでは割愛するが、多くのクライマーにすでに開拓され尽くされているペルーでも、技術的に困難を伴い(WI6, 5.10a) 満足のいくラインを自由に開拓できたことはアルパインクライミングの楽しさと可能性を改めて実感することとなった。グレードこそハンター北壁よりも劣ってはいるものの、核心部を超えてからも、この先がつながっているか分からないという未知の酷い稜線を一步一步克服していく事が、相当ストレスだったようで、下山後の疲労感や充実感、ハンターのそれよりも随分と大きなものだった。AAJの編集者であるPete Takedaも実はこのラインを間近に目にしていたようだが、

氷が繋がっているのは5月の本当に短い期間だけで、そのタイミングをちょうど掴んだ事が成功の最大の要因だった。現地の気候データをきっちりと見て最良のコンディションを予想したとはいえ、こればかりは運が味方したと言える条件だった。

2023年秋、ペルーから帰って2ヶ月のリフレッシュ期間のあと、僕と啓、そして西田を加えた3人はパキスタン・ガンバルゾム5へ遠征に向かった。前述したG6で、僕はG3にトライしていたクライマーのTom Livingstoneに出会い、コヨゾムの話聞いて、このエリアに興味を持った。未踏のガンバルゾム5のベースに着いてみると、当初予定していた北壁がクレバスやセラックの脅威によりトライ不可能であったため、北西稜から山頂を目指すことにした。

この登攀では、見栄えのする大岩壁よりも、複雑な稜線をアルパインスタイルで登ることの方が時には非常にタフで、神経をすり減らされることを学んだ。稜線といっても山自体が非常に大きいので、ロックやミックスクライミングの連続となり、登っている感覚としては壁を登っているようなもの。にもかかわらず、途中で簡単ではないトラバースが入ったり、リッジのせいで見通しが効かないため、壁以上に先を読めないという要素があったり、非常に冒険的な登攀となった。核心部を超えた後も、グレードに表せない往復3kmの青氷の酷い稜線や、ルートファインディング、複雑なギャップなどに苦しみ、登山の総合力を試された。下降もほとんどがクライムダウンやトラバースとなり、最後まで気を抜ける瞬間が全くなかった。そして、この未踏峰の山頂で、僕ら3人は、次の格好の目標となるThui 2と出会ったのだった。

3. 海外登山記録

現代において、良いアルパインクライマーになるには、高難度で多様なジャンルのクライミングスキル、フィジカルが必要なことは間違いない。ただ、もはや言い尽くされ、私が言う事ではないが、アルパインクライミングはスポーツというよりまるでアートのように、オリンピックゴールドメダルのような、誰にでもわかりやすい明確なゴールがない。もちろん強いに越した事はないが、アスリートのな力をいくら鍛えたって、情報がないワイルドでカッコ良い山は見つからないし、ラインを見る目は養われない。僕にとってアルパインクライミングは旅や冒険の延長上にあり、未知を一步一步、クライミングで解き明かす冒険だ。クライミングそのものがギリギリなら、尚のことその冒険は面白くなる。そういった意味でも Thui 2 には完璧に未踏の西壁が残されており、どこをクライミングして山頂に繋げても、全て自分たちの自由。加えて、壁の傾斜も非常に強く、チャレンジングなミックスクライミングを何ピッチも連続できるという、夢のような壁であった。

コロナ後の2022年から2024年、この3年間に行ったエクスペディションの数々が、新しいクライミングの発想と、自分にとって美しいラインを見出す力を養ってくれた。2024年のペルー Quitaraju とパキスタン Thui 2 での2つの初登攀も、これまで少しずつ積み重ねてきた経験がなければ登れなかっただろう。

麓の村に辿り着けるかも分からない、行ってみて登攀可能なラインがないかもしれない、次のピッチが繋がっているか分からない不安の連続、といった未知を次々と克服し、ワイルドな山頂に繋げて

いくような冒険的なアルパインクライミングを追求していきたい。

次の章で、2024年に行った二つの登攀（ペルーは一部省略で）を振り返りたい。

(2)

『2024 Peru Quitaraju 初登攀の記録（一部省略）』

大坪和正、王鞍隼介、鈴木雄大

6/23 BC→ Laguna Quitacocha 4,300m

6/24 Laguna Quitacocha→ ABC 4,800m

6/25 ABC 4,800m →C1 5,450m

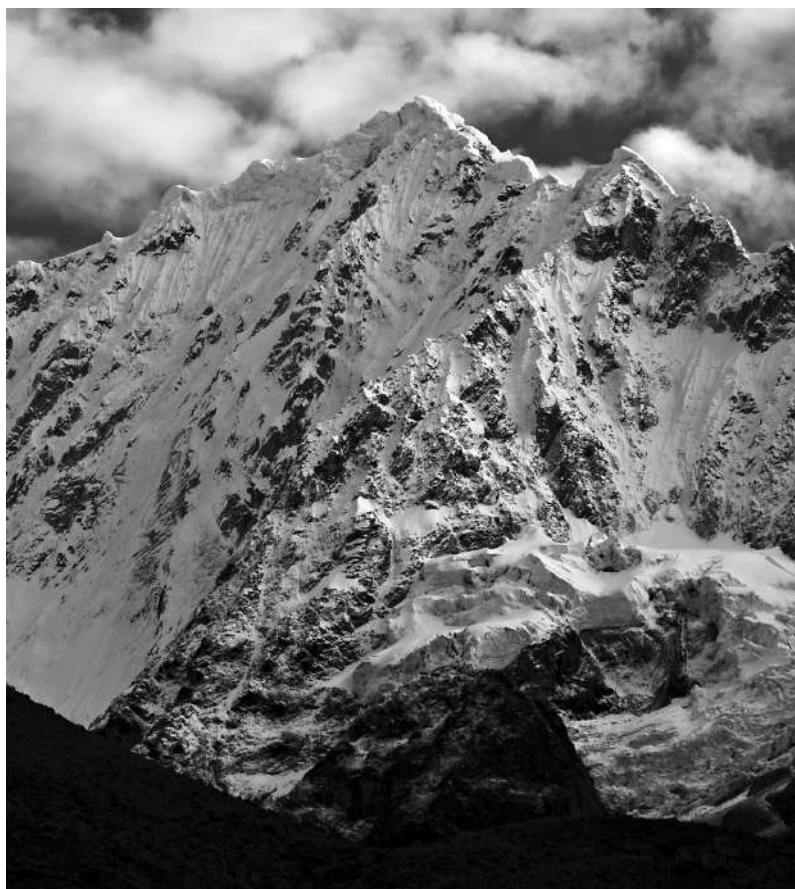
6/26 →C2 5,580m

6/27 →C3 5,760m

6/28 →C4 5,900m

6/29 →Summit6,036m→ North Face BC 4,300m

6/30 North Face BC→ South Face BC 4,000m



【キタラフ南壁・南スパー全景】

2024年、この年は秋にパキスタンThui 2 へ行くことが決まっていたが、僕はさらにもう一つ、比較的安く行けるペルーアンデスへの遠征を熱望していた。そこに丁度よく、大鞍と大坪もペルー遠征をぼんやりと計画しているようだった。いつもの成田啓と西田由宇も興味はありそうだったが、彼らはお金と時間を持ち合わせていなかった。僕も金銭的な余裕はそんなになかったが、29歳という20代最後の歳に、勢いも借りてペルーも行ってしまおうと決断した。また、30歳を超えると海外遠征に行けるようなパートナーは減っていくと日本のクライミングシーンをしていると想像がついたが、この機会に新たなパートナーである大鞍と大坪と、ヒマラヤより安価に、それでいてチャレンジングな対象があるペルーアンデスに行けるのは今後のクライミングキャリアにおいて意義のあることだと感じていた。

本当はみっちりとトレーニングを重ねたかったが、ペルーという土地柄、順応後に街に降りてリラックスもできるので、昨年のように30日間もトレーニング日程を無理やり確保することはできなかった。とはいえ、彼らとは歳も近く、瑞牆山などでフリークライミングをする機会は以前からあった。遠征前には、同時登攀のシステムや登り合わせをする機会が数回程度あったくらいだ。

さて、どのようにこのキタラフの未踏ルートを探したか、僕は2023年にビルカノタ山群のアウサンガテ北壁に登ったが、より一般的なブランカ山群に行ったことがなく、いつも興味を持っていた。その中でも、未踏のラインを見出し、初登をするのが今回の狙いであった。ブランカでは、大体の山に既登ルートがあり、AAJ やオンライン検索でラインを見つけることができた。そんな中、キタラフの南壁と南spur は誰もトライしたことがなさそうだというこ



1 ビバーク目、予想より遥かに狭かった稜線上で、束の間のレスト。あの画面奥のセラックに何時間が晒されていたのはあまり良くなかった。



リッジとはいえ、体感としては本格的な冬壁クライミングの連続

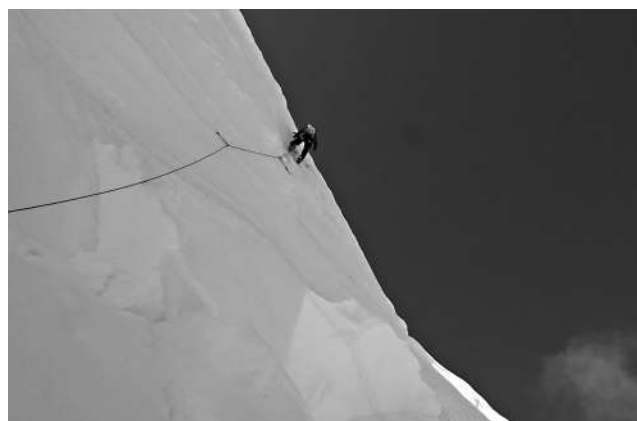


2 ビバーク目、この洞窟があったのも奇跡的で、これを逃すと暫く泊まれそうになかった

3. 海外登山記録

とが分かり、これはブランカ山群における非常に冒険的な課題の一つになり得るのではないかと思った。特に、写真からも、上部にあまりに巨大なセラックが垂れ下がるようなこともないのも魅力的であった。かといって、よくペルーにある雪壁や氷壁の登攀に終始するような単調な内容でなく、ロックと氷雪のミックス壁の下部、スノーマッシュルームの連続する冒険的な南spur、最後に5,750mを超える標高での複雑そうな南東稜という、様々なアルパインクライミングスキルを使って登っていく内容が面白そうだった。最後の南東稜の高低差250mほどは、40年程度前に登られたのではないかという情報はあったが、時代からしておそらくFIXロープでの登攀だったのではないかと予想したのと、全体の行程からして、そのパートがとても短いこと、また、40年前なので、温暖化などにより稜線の状態もとても変わっているだろうとの予想から、私たちのこの冒険をやめるには足らない事前情報であった。いずれにしろ、この40年前の記録は、ほとんど参考になるものがなかった。ブランカ山群には色々と候補があったものの、最終的に決まったこのキタラフに、メンバーの3人もとても盛り上がっていた。

私たちは、対面にアルパマヨのルートがよく見えるキタラフ北壁から高所順応を行った。一番よく登られているルートとはいえ、60～70度程度の氷に熱い太陽が照り付け、そこそこ大変な順応だった。氷壁を登り切ったところで、山頂へは更に標高差40mほど高く、また、水平距離で数百mほど歩かないといけなかったのも、山頂の少し手前で降り始めた。そして一度ワラスの街へ帰り、作戦を立ててキタラフの南面に戻ってきた。最小限の荷物を持って、馬2頭と一緒に歩き、ベースキャンプをLaguna Jatuncocha に設置した。標高は3,880m程度だ。



不安定な雪氷の垂壁。日本の普通のジムの天井から地面くらいまで落ちた。(写真：大坪)



山頂間近まで、ずっとクライミングの連続。BCからはあそこは歩けそうだななんて思っていたけれど…



不安定なリッジ。一つ一つのマッシュルームにとっても時間を奪われる

ここから先、南壁の麓までは険しい急勾配な草やガレ場となり、馬は上がってこられない。そこは我々だけで、Laguna Quitacocha のさらに先まで、4,800m地点にABCを設置した。この南面はアルパマヨへの登山道とは非常に異なり、暫くの間、人が立ち入った痕跡が見当たらなかった。頭より高く生いしげる藪を掻き分けて重荷を上げるのは中々大変だった。

さて、アタックの5日間については、文字数の関係や、既にRock & Snow に寄稿してしまったのと、この『登山研修』の中で、王鞍隼介が書いてくれるはずなので、ここでは割愛する。一言で言うと、「勢いに任せて超えた山頂」という感じだ。人それぞれ感じ方は違うだろうが、個人的には、R/Xグレードのつく下部岩壁を同時登攀したり、2～5日目の不安定な雪や氷の稜線を半信半疑でジリジリと進んで行ったりと、かなりリスクに思える行程だった。ガンバルゾムの時に体験した不安定なリッジクライミングをまさか2年連続やることになるとは。しかももっと不確定要素が強かった。ぶったちの壁ならいつでも懸垂下降できるけど、そうはいかない。ただそうした要素が、振り返るとこのキタラフでの登攀をより面白いものにしたのだと言える。

この登攀の後、ワラスの街に戻ると僕の心はすでにパキスタンに向いていた。7/13に一度、ペルーから帰国し、8/19にはイスラマバードへ渡っていた。この1ヶ月強は、ジムや岩場でクライミングのフィットネスを取り戻すことに努め、栄養もたくさん補給してリラックスするよう心がけた。パキスタンへ出国する頃にはジムで5.12-まではオンサイトもできたので、アルパインクライミングをするには充分な体調だった。

(3)

『Pakistan Thui 2 西壁初登攀』

西田由宇、成田 啓、鈴木雄大

4 days on the wall

9/20 BC→ ABC

9/21 ABC 5,000m→ C1 5,810m

9/22 C1→C2 6,250m

9/23 C2→C3 6,523m (at the summit)

9/24 Summit→ ABC

9/25 ABC→ BC

昨年、ガンバルゾム5の山頂に立ち、美しい山々に沈む夕日の光景を僕は忘れられなかった。その内の一つのピークがThui 2であり、最も険しく、唆られる山であった。僕らは早速、ガンバルゾムと同じチームで1年後、この山域に戻ってくる事に決めた。Thui 2 西壁へのアプローチとなるリシト氷河には、フランスチームが数年前に春の時期にスキーとクライミングで訪れたことしか情報がなかった。彼らはツイではなく、リシトピークに登ったようだ。我々はガンバルゾム5と全く同じ時期、9月一杯をこの山で過ごすこととした。リサーチを進めていくと、日本の古い書籍である『世界山岳地図集成』に「ヒンズー・ラージ山脈が東西から南北に折れ曲がる分点に位置する山脈第三の高峰トゥイ2峰。その姿は台形のジャンダルムを従え、三角錐の尖峰はヒンズー・ラージでは最も立派な孤峰といわれる。」との魅了的な記載が。初登はイギリス隊の1967年の初トライから11年後、1978年8月4日。それから現在まで46年の間、この山に関する登攀記録は全く見当たらない。そして、Google アースでリサーチする限り、Thui 2の西壁はミックスクライミングに適した氷や岩の形状が山頂まで続き、パキスタン北西辺境で、誰も訪れた事がなく、冒険的で長大なクライミ

3. 海外登山記録

ングが期待できそうだった。

チトラルからアフガニスタンとの国境を目指して、ジープで2日かけて北上して行くと、Shostという小さな村に到着した。ここには学校もあり、多くの子どもと、そして僕らを珍しがる警察が話しかけてきた。どうやら、これまで以上にワイルドなダートをさらに30分ほどジープで進めるようだ。僕らは村が最後はどこまで続いているかすらよく分からなかったが、強引なパキスタン人ドライバーの見事な運転により、斜度35度の坂をジープで上がり、最終の村、トリカンド（カンド1）に到着した。村といってもここには実質1家族しか住んでないようで、僕らのガイドが住民と交渉して、ホームステイさせてもらえることとなった。その家の1人は大学生で、僕たちとお互いを珍しがって色々な話をした。彼らはとても親切に僕らをサポートしてくれた。早速準備を進め、トリカンドから歩いて6～7時間ほどでベースキャンプに適した最後の草地を見つけた。標高は4,300m。ベースキャンプの候補地も全く予想がつかなかったのも、草の平らなスペースと、本当に小さな水の流れがあり、ラッキーだった。私たちはすぐに高所順化でリシトピークの近くまで登りたかったが、4日間ほど雨が続き、ベースキャンプでゆっくりと休んでから出発した。その後の好天周期は10日間ほど続き、5日程かけて6,000mの無名のポイントまでタッチ、リシトピークのすぐ北の5,740mのコルで2泊することができた。この順応登山の行きと帰りに、ターゲットであるThui 2の様子を観察し、登攀ルートを大まかに決める事ができた。ルートは下部5分の1程度の雪壁と、大部分が垂直に近い氷や岩で構成され、特に核心部分は6,200mを超える山頂直下となりそうで、1,500m近くの冒険的なクライミングとなりそうだった。早くトライを始

めたかった。下部雪壁を詰めた後で壁の弱点が繋がっているか、よくわからない部分もあったが、私達は偵察では一切壁には触れず、デポもしない、綺麗な一筆書きで本気トライをしようと決めた。そして、順応を終え、疲労もある中ベースキャンプへ戻ると、4日後くらいから、長いストームが来るとインリーチに知らせがあった。



BC。大量降雪前と後

レストも含めると、このストームをやり過ぎて次の好天周期が唯一のチャンスとなりそうだ。僕たちは”Basecamp mode”に入り、ボルダリングをしたり、映画を見て過ごす。結局そのストームは1週間以上続き、12日間、ベースキャンプでダラダラと過ごすことになった。ひどい時はキッチンテントの上に50センチの雪が積もり、最悪の事態も頭をよぎった。でも、晴れがくると、強烈な日射が雪を溶

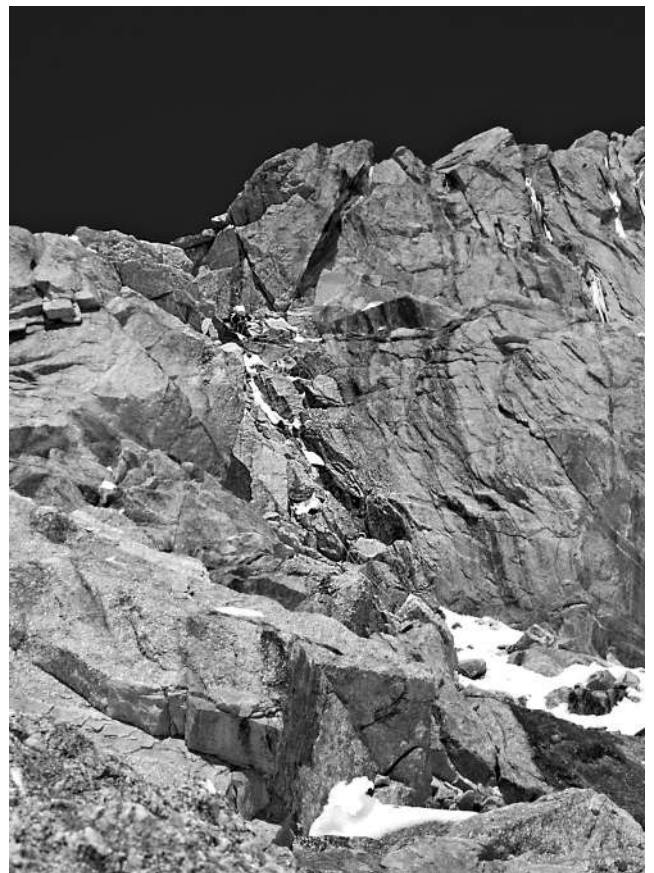
かし、少しずつ草が見えるようになってきた。上部の雪田の状態がベースキャンプからは読めず、雪崩を心配していたが、僕は好天周期を掴んでABCへと戻った。

いよいよアタック開始。4日半分の食糧と少しのギアを持って、最初の雪壁を駆け上がる。花崗岩の基部からプロテクションを取りつつ、同時登攀の長い2ピッチ、ロープの長さでおおよそ8ピッチ分くらいだろうか。良いペースで実際の険しいクライミングが始まるベースへ辿り着いた。出だしから溶けかけの怪しい氷。幅30センチほどのベルグラと凹角を頼りに、僕は何とか登った。設置したトライカムを足元にすると、ロープの揺れで外れていくようなフレアした脆いクラックしかなかった。M4+R程度だろうか。砦のように塞がれていたかと思われた岩壁も、なんとか弱点が続いている。だが、その次の重要なピッチも、氷がシャワーのように溶けていて、困難を極めた。幸いなことに、氷のとなりにクラックがあり、ドライツーリングとジャミングを使って何とか這い上がる。クラックに雪と氷が詰まるM7のピッチだ。成田啓も僕も日本でM11+まで登っているが、確かにこれは悪かった。標高もすでに5,600mを超えているだろうか。持っていた最大のキャメロットである#3よりもクラックは広がり、フリークライミングで抜けるしかないが、よく頑張った。そこから全てスタカットクライミングのピッチが続き、西田の2ピッチも印象的だった。90度の積み木のようなロックピッチを2つ、最後の少しオーバーハングした抜け口では溶けた薄氷のマントルをこなす。この最後の5メートルだけは、重い荷物のフォローは登るのに時間がかかりそうなので、荷揚げを行った。その次のピッチで蜘蛛の糸と呼んでいた上部の大きなベルグラが見渡せるスノーバンドまで出る。

日も沈みそうなので、大きなボルダーに守られた2メートル程のスペースをスノーハンモック（テントのフロアシート）で拡張し、bivy1とした。5,810mまで登り、フラットなビバークサイトも発見できたので、今日は良い調子だ。最初の8ピッチ程の同時登攀を含んで、15ピッチ分程伸ばすことができた。



1日目、序盤核心。成田がM7のクラックを突破する。乗っ越しはワイド気味となり、ギアがなかったので緊張する。



初日からこんなクライミングの連続。西田の強気のルートファインディング！



5,810m地点のキャンプ1。背景のような60度以上の雪壁をテントフロアシートでここまで平らに工作できた。

2日目、まずは雪壁セクションをロープの長さで3ピッチ程の同時登攀で駆け上がり、氷とミックスの傾斜の強いルンゼに吸い込まれる。ここでスタカットに切り替えるが、まだ朝なので氷も硬く、素晴らしいクライミングで高度を稼ぐ。毎回ロープ一杯60m近くまで、7ピッチほど、途中ハンギングビレイなども交える強い傾斜のクーロワール地形を登って行く。一部氷も雪もない酷く脆い垂直の部分が出てきたが、幸いとても狭い形状となっていたので、素手になってチムニー登りで突破する事ができた。チムニーにさし掛かる前に打ち込んだピトンが簡単に抜けるくらい脆かったので、5.8～9程度のワイドを慎重にフリークライミングすることが求められた。プロテクションは受け付けてくれなかったが、なんとか登れる形状だったことが幸運だった。

圧倒的な迫力で聳えるヘッドウォールの中に、奇跡的に存在する唯一の弱点は、僕らを高みに導いてくれた。最後はかなり脆い岩を、斜めの小リッジのようなスペースに這い上がった。高度障害の影響や疲労の蓄積もあり、このチャンスを逃すまいと、ここをビバーク地にした。またして、スノーハンモックで1人分のスペースを追加で拡張して夕暮れと同時にビバーク2。頭や足は宙に浮いているものの、6250m地点で横になって休めたのは明日に向けての



この後非常に脆いワイドとなり、素手になってなんとか突破する鈴木。写真＝成田



6250mにてビバーク2。またもやスノーハンモックが大活躍した。

希望が大きく膨らんだ。ここまで合計25ピッチくらいか。

3日目、今日はあと300mだけだ。荷物を全て置いて山頂を踏んで帰ってくるかなんて話もあったが、傾斜が更に強まりそうなのと、この先がどうなるか全く分からないので、全て背負って出発。これが結果的には良い判断であった。今日は成田からスタート。いつも通り2ピッチ交代でのクライミング。1ピッチ目、嫌らしい10mのダウンクライムしながらのトラバースをこなす。そして2ピッチ目、凹角に薄く張り付いたベルグラを登るまさにミックスクライミングというピッチ。氷からのプロテクションは非常に乏しいが、側壁から小さなカムがとれる。僕はフォローだったが、上部の氷が途切れたところ

で、アックスを横にスポッと入れるトルキングが印象的なムーブだった。M6 程度だ。成田啓は6,300mでトルキングをするなんて夢のようだと言っていた。ここを太陽があたる前に通過できたことも、幸運とはいえ、大事なポイントだった。明日にも無くなりそうな氷だった。



6,300mでトルキングをキメる成田啓



6,350m。下からよくわからないが、西田がジリジリと突破 M5-



見下すとこんな感じ。サードで登る成田啓。ベースキャンプは2,000m遥か下に見える。

3 ピッチ目、少し雪壁を登ると左右に進路が取れそうだったが、左に行くとそのままクローワールの雪壁に合流できそうで、ルートとしては味気ないものになりそうだったので、敢えて右の垂壁を覗いてみる。すると一見登れなそうな大岩壁のスラブの海に見えたが、奇跡的に硬く上質なガバが繋がっている。岩質はこれ以上ないほど素晴らしい。西田がドライツールリングで超えて行く。もう6,300mを超え、垂直の動きは一手一手息が切れ、頭が痛い。

4 ピッチ目も三つ星の80度程度の凹角のミックスクライミング。上手い事ラインが繋がっていたのが本当に不思議だ。5 ピッチ目、ここでリードを僕に変わるが、壁の雰囲気が一転。少し遠くを見上げると凹角や弱点はなく、大きなスラブで覆われている。さてどうしようか。とりあえずスラブの基部まで登ると、一筋だけシンハンド～ピンキーフィンガーのクラックが繋がっているではないか。ここから大きくトラバースするのも一苦労が予想されたので、一か八か、クラックを直上する。太陽も当たってはいたが、流石に6,400m、素手では少し冷たかったが、グローブでは無理なので素手でジャミングをしながら登る。半分程登るとフットホールドがなくなり、アイゼンを脱ぐが、もはやフリークライミングでは不可能なので、エイドに切り替える。小さなカムとトライカムを決め、所々クラックが途切れているところは数手のムーブをフリーでジワジワと登る。最終的にクラックが完全に途切れるが、1 m となりにあるフレイクと、最後のアンダーに腕を一杯伸ばして、なんとかキャメロットの#0.2が決まったので、スリングをかけ、恐る恐る立ち込んだ。際どい体制でシュガースノーを除雪しつつ、脆い岩を押さえつけるようにしてマントルを返せた。この先直上出来るかどうかもだいぶ怪しかったので、一先ずテラス

3. 海外登山記録

でピッチを切る。1時間以上は格闘しただろうか。スラブの中に差し出された一筋の小さな割れ目、繋がられたのが今でも不思議なくらいだ。



6,400m。最後にして、最も冒険的だったピッチ。スラブの海に唯一あったクラックが途切れつつもテラスまで導いてくれた。

6ピッチ目、真上を見ると上質なフレークがある。だがその先がどうなってるかは分からない。上部が見えないという事は傾斜が寝てきて何とかなると言う事だろう。と希望的観測のもと、ひとまずガバを頼りに5mほど直上すると、一面に氷の斜面が見渡せた。これで山頂まで繋がる！岩から氷に移ると、すぐにここがブルーアイスの拷問パートだと分かる。



6,400m～。ダメ押しの5.8程度のフレークから、今度は氷の海へ

あと少しのはずだ。これまでのクライミングが想像以上にテクニカルで、この時点で夕方3時を過ぎていた。全力で硬い氷にアックスを叩き込むが、

6,400mを超え、スピードは出ない。それでも皆で交代しながら全力で最後の氷を登ること4ピッチ。西田が登っていると、急に反対側が切れ落ちる山頂に飛び出した。空は既に濃いオレンジ色となり、6,523mの高所と強風にクタクタになりながら、1時間半ほどかけて山頂ビバークの準備をする。成田と西田は整地し、僕は安定した小さなスペースをつくって水作りをした。幸い、今までで一番平らなスペースを確保できたが、激しいクライミングと高所、強風、太陽が沈む寒さで惨めなビバークとなる。体が弱っていたのもあるが、マイナス20度くらいに感じられた。

でもやり切った。同時登攀もロープスケールで数えて全部で32～34ピッチくらい登ったか。あとは明日、丸一日かけて下降するのみ。

4日目、朝起きると、対面には昨年初登したガンバルゾム5が神々しく聳える。この角度から見ると、昨年のラインが手にとるように分かり、想像以上に長いリッジを登ったんだなと感慨深い時間だった。

8時頃、相変わらず風も強く寒いので、急いで懸垂下降に取り掛かる。でもこの絶え間ない強風にも感謝だ。恐らくあのBCでの停滞中に降った大雪をこの西風が全て吹き飛ばしてくれたのだろう。リッジを少しクライムダウンしてリシトピーク側の斜面をオンサイトで降りるアイデアもあったが、リッジがやはり悪そうだったので、登りルートに沿って懸垂下降が安全だと判断した。氷があればなるべくVスレッドをロープ直通しで行い、捨て縄を節約しておける。捨て縄も25mほどしか持参していなかった。氷のセクションを終えると、殆どをピナクルを支点に降りていったが、花崗岩のためか、探せばどこかしらに使える岩があつて助かった。ただ、捨て縄が少ないので、なるべく最小限に小さく、頑丈な構造の岩を探すことに気を遣った。唯一何もなかったと

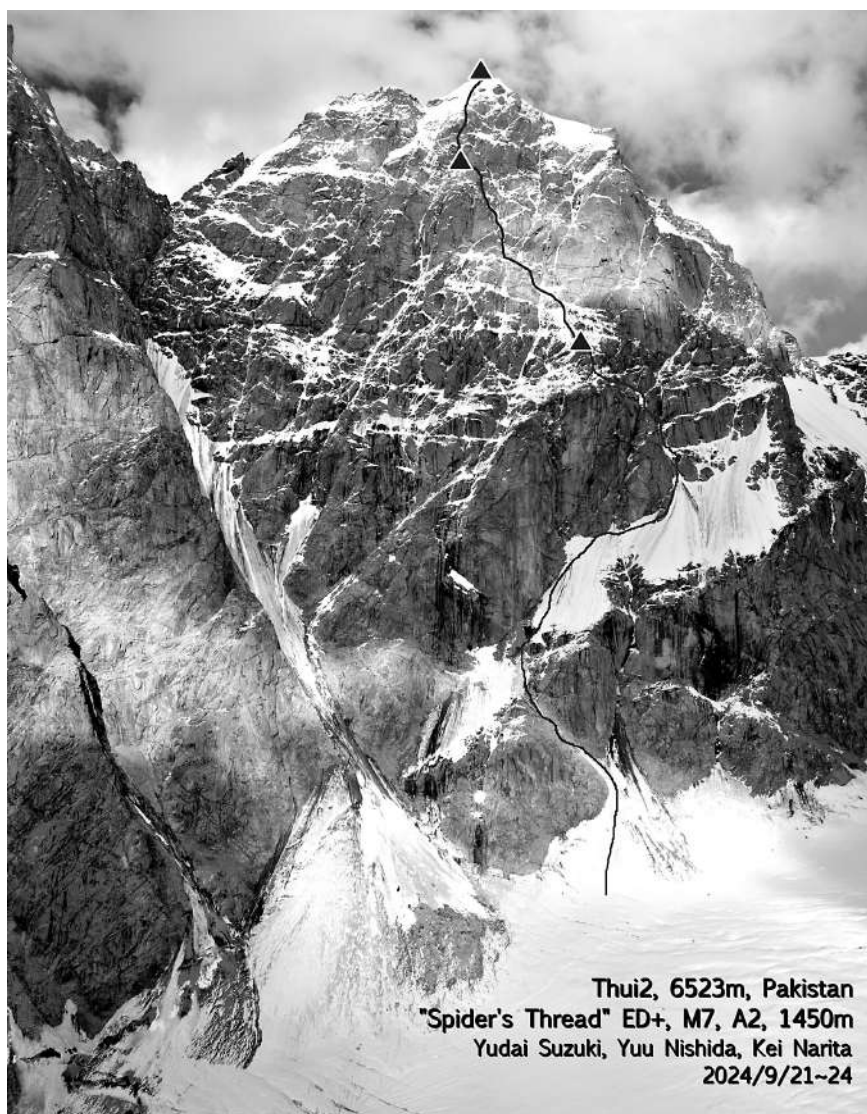


一部直線的に降りることによって捨てなわを節約。集中力が求められる下降。

ころに短いピトンを2枚打ち、それ以外は全てピナクルで懸垂下降し、山頂から23回（？）程の懸垂下降で、最初の同時登攀セクションの上部まで降りる事ができた。25m 全ての捨て縄と、スリングを4本残置した。

既に夜7時を過ぎて真っ暗だったが、雪は締まって上からの落下物もない時間だったので、そのまま登りの逆で3人同時クライムダウンを繰り返す。所々、ヒマラヤ特有のブラックアイスも出てきたが、スクリュウやカムを決めながら、落ち着いて処理し、10時にリシト氷河に降り立った。とても長く、集中力が求められる下降だった。ABCまであと一息、1時間しないくらいでトボトボと氷河を降り、4日ぶりにハーネスを脱いだ。夜11時過ぎだった。なんとも言えない素晴らしい充実感に包まれ、翌朝10時まで久しぶりの濃い空気の中ゆっくり眠った。この標高に

して、高難度かつ上質なミックスクライミングから積み木のようにボロい壁やベルグラ。素手でのロッククライミングと、そして登るに従ってスティープになっていくヘッドウォール。シビアなエイドクライミングに加え、最後はいつも通り、拷問のブルーアイスセクション。スノーハンモックを利用したの2ビバークや、山頂での悲惨なビバークも印象的だった。アルパインクライミングとは如何にオールラウンドで、自由で、素晴らしい登り方なのかと再認識させられた登攀となった。何より、このパキスタン辺境にある、美しくワイルドな未踏壁を山頂までダイレクトに、一筆書きというシンプルかつ美しく、満



Thui2, 6523m, Pakistan
"Spider's Thread" ED+, M7, A2, 1450m
Yudai Suzuki, Yuu Nishida, Kei Narita
2024/9/21~24

全景、ルート図。

3. 海外登山記録

足いくスタイルで登れた事が嬉しい。ベースから壁を見上げ、特に最上部はまるで想像がつかなかったが、行ってみたらクラックや氷、そして最終的には1cm以下のクラックに奇跡的にギアをきめて這い上がったこと、これら全てが繋がったことが本当に信じられない。僕にとってこの未知の登攀はまさしく大冒険であった。この原稿で、クライミンググレードをいくつか記載しているが、それはあくまで、写真では伝わらないリアルな状況説明を補うため、後からつけたものだ。その数字は僕にとってあまり重要ではなく、全てをワンブッシュで、山頂まで攻撃的に繋げられたことに非常に満足している。

大岩壁に蜘蛛の糸のように張り巡らされた氷と、ベースキャンプに無数にいた大蜘蛛から、Spider's Threadとルートを名付けた。

9月25日、ABCからBCへと戻り、1日挟んで9月27日、久しぶりに6人のポーターたちと再会し、登頂の喜びを分かち合った。登山者が来ないこのエリアで、彼らもポーターをするのは実は初めてのようだったが、凄く喜んでくれたのは嬉しかった。麓の一軒家に帰り、久しぶ

Day	日付	曜日	出発地	宿泊地	行動内容	天気
1	8月19日	月	東京	イスラマバード		
2	8月20日	火	イスラマバード	チトラル		
3	8月21日	水	チトラル	チトラルにて準備		
4	8月22日	木	チトラル	チトラルにて準備		
5	8月23日	金	チトラル	マストウージ		
6	8月24日	土	マストウージ	トリカンド		
7	8月25日	日	トリカンド	BC偵察→トリカンド日帰り		晴れ
8	8月26日	月	トリカンド			雨
9	8月27日	火	トリカンド	BC4,300m		晴れ後雨
10	8月28日	水	BC停滞			曇り、雨
11	8月29日	木	BC停滞			曇り、雨
12	8月30日	金	BC停滞			雨
13	8月31日	土	BC停滞			雨
14	9月1日	日	BC	4,870mまでタッチ→BC		晴れのち一時雨
15	9月2日	月	BC	BCにて装備食糧準備、レスト		晴れ
16	9月3日	火	BC	ABC(5,020m)まで荷上げ、宿泊		晴れ
17	9月4日	水	ABC	5,740mのコルまで		晴れ
18	9月5日	木	5,740m	5,740m→6,000mタッチ→コルキャンプまで		晴れ
19	9月6日	金	5,740mキャンプ	5,020mABCまで下降。その間、本番ラインの確認		晴れ
20	9月7日	土	ABC	BCまで下山。登攀具はABCにデポ		晴れ
21	9月8日	日	BC停滞	レスト		晴れ
22	9月9日	月	BC停滞	ボルダリング 開拓		晴れ曇り小雨
23	9月10日	火	BC停滞	ボルダリング開拓		晴れ 小雨
24	9月11日	水	BC停滞	レスト		晴れ
25	9月12日	木	BC停滞	ボルダリング 開拓		晴れ
26	9月13日	金	BC停滞	停滞		曇り
27	9月14日	土	BC停滞	停滞		雪、夜大雪30センチ
28	9月15日	日	BC停滞			朝雪、のち晴れ
29	9月16日	月	BC停滞			晴れ時々小雪
30	9月17日	火	BC停滞			曇時々雪
31	9月18日	水	BC停滞			雪
32	9月19日	木	BC停滞	12日停滞終了		晴れ
33	9月20日	金	BC	BC→ABC		
34	9月21日	土		アタック1		
35	9月22日	日		アタック2		
36	9月23日	月		アタック3		
37	9月24日	火		アタック4		
38	9月25日	水	ABC	ABC→BC		
39	9月26日	木	BC	総BC宿泊数=21日		
40	9月27日	金	BC	BC→トリカンド		
41	9月28日	土	トリカンド	トリカンド→ラシト→マスツジ		
42	9月29日	日	マスツジ	マスツジ→プニ		
43	9月30日	月	プニ	プニ→ザニバス偵察→チトラル		
44	10月1日	火	チトラル	チトラル		
45	10月2日	水	チトラル	カラージャ		
46	10月3日	木	カラージャ	カラージャ		
47	10月4日	金	カラージャ	チトラル		
48	10月5日	土	チトラル→イスラマバード			
49	10月6日	日	イスラマバード			
50	10月7日	月	23:20 イスラマバード→東京			

図表1 行程表 ※アタック日は全て晴れ

りの手料理で祝福してくれたのが、栄養不足の僕らの体に染み渡った。



壁全景と未だ2チームしか触れたことのないリシト氷河

(4)『2024年 まとめ』

2024年も、ペルーとパキスタンでの登攀が幸運なことに上手くいき、僕にとって大きな1年となった。どちらの登攀も、行けるか行けないか分からない状況が連続し、未踏のアルパインクライミングにおいて重要なことを改めて学ばされ、アルピニストとして成長させてくれる経験となった。何を学んだか？それは多すぎてここには全て書ききれないが、3つほど挙げてみると以下の通りだろうか。

1つに、「ルートが繋がっていると信じて登ること」キタラフの迷路のようなマッシュルームのリッジや、ツイ2の最後の6,400m地点での際どい極小ギアでのエイドセクションなど、下から見ても分からない核心部に突入する時、躊躇していたら勢いよく突破できなかっただろう。一歩進んでしまったら、そこにコミットするしかない。手掛かりやクラックを必死で探し、自分を信じてルートをこじ開けるのみ！

2つ目に、1と少し矛盾するようだが、「現実的であること」これは常に冷静に、最悪の状況をイメージしながら登ること。突っ込む時は躊躇してはいけ

ないが、自分のコントロール下におけないリスクの許容度は、現実的に慎重に判断した方が良い。今回、ペルーで15mの大墜落をした際は運が良く、怪我をしなかったが、もう少し慎重なライン取りをすべきだった。

そして最後に、「良い未踏ラインを見つけ、登りに行く行動力」これが一番難しい。幸運にも僕は、ネパールのラジョダダ（2017年）を含め、これまで5本の6,000m峰での初登攀を経験できたが、日本のアルパインクライマーとして、そのエリアのローカルでもなければ、その壁や山のコンディションに詳しいわけでもない。とにかく、現代のインターネットやGoogle Earthなどを駆使してターゲットの候補を見つけ、未踏ルートについて想像を膨らませるしかない。後は現地に行き実際に行動力とモチベーション、最大限のコミットメントが大事である。当たり前だが、誰も行ったことがないのだから、登ってみたいとどうなるか分からないというわけだ。

2024年にキタラフとツイ2が教えてくれた大きな経験を糧に、これからも冒険的で創造的な、人が成し得たことのない大きなアルパインクライミングのラインを見つけ出し、自分が知らない世界を広げていきたい。

鈴木雄大

東京に住んでいるが、大半の時間をバンで過ごし、日本の岩場や山を転々として過ごしている。遠征に行っていない時は、日本でロックやアルパインクライミング、バックカントリースキーをし、その全ては高所でのアルパインクライミングに繋がると考えている。早稲田大学山岳部のコーチや、The North Face アスリートとして製品開発に携わったり、山岳写真の撮影や、講演会をしたりと、フリーランスで活動している。